

琉球大学学術リポジトリ

一人ひとりの思いや考えをはぐくむ道德の授業づくり
ーセーフティに根ざした「探究の対話 (p4c :
philosophy for children)」の実践ー

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学大学院教育学研究科 公開日: 2022-05-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 呉屋, 美穂 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002017962

一人ひとりの思いや考えをはぐくむ道德の授業づくり

—セーフティに根ざした「探究の対話 (p4c : philosophy for children)」の実践—

呉屋 美穂

琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻・うるま市立城前小学校

1. テーマ設定の理由

(1) 見つけたよさを語らせていたことと、見落としていた子どもの「問い」

これまでの筆者の道德の授業実践は、教材の中から「よさみつけ」を行い、見つけたよさや気になることについて理由も併せて語り合うことを行ってきた。例えば、「ひしゃくぼし」(しょうがく どうとく ゆたかなこころ 1ねん 光文書院)の授業では、教材の中にあるよさ(内容項目;美しい心)について「水を探しに行ったのはすごかったと思う。なぜなら△△だから」と語ることはできても、「どうしてだろう、なぜだろう」という視点での問いと、自分のこととして考える問いが少ないため、さらに自分の考えを深めることが難しいのではないかと振り返るに至った。しかし、前述の「ひしゃくぼし」の授業の子どもたちのふり返りを読んでみると、「なんで水がこぼれないのかな」という不思議に感じたことや疑問が書かれていた。「なぜ?」を辿っていくと、今まで語っていた「よさ」の先に「何か」が見えるものがあるのかもしれない。「なぜ水がこぼれないのか」という子どもの問いは、「何か」を見出し、いこうとする始まりとなるのではないか。子どものふり返りを読んでみると、そのような問いがたくさん見られたことと、その問いを見落としていたことに気が付いた。

(2) 「考えたい」と思うことからの探究の始まり

その「何か」を見出そうとすることは、自分自身と対話をするところから始まる。その対話を豊かにするには、実際にさまざまな考えに出会って、お互いの思いや考えを聴き合う対話の体験が必要である。ここで取り上げる「探究の対話 (p4c : philosophy for children)」は、「考える」という行為そのものに焦点をあて、学びのプロセスを捉え直す教育であり、子どもたちの立てた問いを大切にしながら、「知的安全性 (intellectual safety)」の中ではぐくまれる対話を通して考えていくことを基本とする。豊田(2020)は、「p4c のユニークなアプローチとして、『教師が問いを出し、子どもが考える』というのが従来の授業の形式だとしたら、これまで教師が担っていた『問う』という役割を子どもたちにも広げていこうとしています。なぜなら、考えるという行為は、問いを抱くことによって活性化されるからです。」と述べている。また、「授業のテーマや教材を提示するのが教師であったとしても、そこから探究の問いを立て、対話へとつないでいくのは子どもたちです。問いをもつということが考え始めるきっかけであり、そのきっかけをそれぞれがつかんでいくことが重要なのです。」と述べる。さらに、「対話を通して、異なる見方や考え方にふれることで、新たな発見をしたり、さらなる疑問を抱いたり、当たり前だと思っていたことが揺さぶられたりすることを経験します。その過程で、自分の考えに気づき表現する力、論理的に考える力、固定観念を揺さぶり問い深める力、さらには他者と共に考える場を構築する力などを高めていくことを目指します。」としている。露木(2019)は、「夢中になって追求していく子どもは、あるとき、自分の見方や考え方が大きく変化していることに気づきます。対象だけでなく、仲間にも、そして自分自身に対してもそれを感じるのです。」と述べている。自ら考えることの魅力や、友だちの考えを聴くことで自分の考えを見直したりする、そのような実践を重ねることで多様な考えにふれることよさを感じながら、一人ひとりの思いや考えを分かち合いはぐくんでいくことにつながるのではないかと考える。

2. 研究の目的及び方法

本研究では、探究のコミュニティを醸成し、探究の源泉である「問い」を大切にする探究の対話(p4c)の先行研究の論点を踏まえ、「セーフティに根ざしたコミュニティづくり」と子どもが立てる「問い」を軸にした授業を行う。その際、対話の場のセーフティについて質問紙調査を行い、対話についてふり返る。また、立てた問いをもとに多様な考えにふれながら探究を深め、一人ひとりの思いや考えを分かち合いはぐくんでいくことにつながることを明らかにしたい。

3. 研究内容

(1) 理論的背景

P4C (Big P Philosophy ; 大文字のPのフィロソフィ) という教育の原型を考案したのは、マシュー・リップマン (Matthew Lipman 1922-2010) というコロンビア大学の哲学者である。リップマンは1960年代後半頃からP4Cの開発を始めたが、そのきっかけは、豊田 (2017) によると、当時のアメリカでは学校教育において「考える力」の育成が必ずしも重要視されていないということ、「考える」ことそのものに焦点を当てたカリキュラムが発展途上だということに認識したことであった。リップマンは1974年、モンクレア州立大学にP4Cの推進拠点 (Institute for the Advancement of Philosophy for Children: IAPC) を設立した。この拠点がP4Cを学ぶ世界60か国以上の国々のプラットフォームとして成長し、発展した地域の一つのアメリカ合衆国ハワイ州では、1980年代後半から学校現場でのP4Cの実践が始まった。しかしながら、実践を継続することの難しさや、P4Cのために開発された教材を学校現場で活用することの難しさが認識されるようになった。ハワイにおけるP4C実践の中心的役割を担ってきたハワイ大学のトーマス・ジャクソン (Thomas E. Jackson) は、リップマンから学んだ「子どもと哲学する」という教育の精神を引き継ぎ、p4c (little p ; philosophy 小文字のpのフィロソフィ 参加者の経験や考えをもとに、「どうして?」「本当に?」と問いかけながら物事の理解を掘り下げていく営み) への転換へと発展させていった。今回、ともに考えるコミュニティの醸成をめざすこのハワイp4cの理論を、授業へ反映する方法を模索していきたい。

(2) 探究心を育むp4cの礎となる考え方

① 探究のコミュニティを醸成する…「セーフティ」の重要性と対話のふり返り

p4cの探究は、語り合い、共に考えるコミュニティができてこそ、進化していく。どのようにしたら学級は探究のコミュニティとして成長していくことができるのか。大切なことの一つは、対話の場の「セーフティ」を意識して高めていくことである。対話のなかで多彩な声が共有されるためには、それぞれが心に浮かんだことを表現できる場が必要であり、そのような場をつくる「知的安全性 (intellectual safety)」が道しるべとして掲げられている。先述のジャクソンは、知的にセーフなコミュニティを創る要素の一つとしてコミュニティボールの活用を挙げており、「一本一本の毛糸は、子どもたちの考えや考えを表現する方法が多様であるように多様な色を持つのですが、探究と子どもたちの互いへの尊敬という中心によって束ねられている」と述べている (ジャクソン/バトナー, 中川訳 2015)。また、探究のコミュニティの成長に欠かせないのが、対話についてふり返る時間を組み込むことである。知的にセーフなコミュニティについて、自分たちで考え、修正していく。この修正のプロセスの定着から、探究のコミュニティは成長することができる。

② 「授業を急ぎ進める教師」と「沈黙を含めて待つ」こと

前述のジャクソンは、p4cを進めるときの心構えとして、「急いでどこかに辿り着こうとするのではない (We are not in a rush to get anywhere.)」ということを強調している。豊田 (2017) によると、対話は問いを立てることから始まるが、その目的は必ずしも問いの答えを時間内に急いで出そうとするのではなく、ゆっくり時間をかけて多様な視点から問いを吟味することが、p4cの醍醐味であると述べている。

課題研究中間報告

また、子どもを思索者として尊重し、教師も共に考える探究者として「沈黙を含めて待つ」という姿勢が求められるとしている。このことは、いつも授業の導入を行ったあとに「よき見つけ」をして「話させたい、書かせたい」と盛りだくさんに授業を急ぎ進めていた筆者の授業をふり返る大きな視点となった。

4. 実際の授業

(1) 授業実践 (公立A小学校, 第2学年3学級, 令和3年9月6日～9月17日)

道徳科 教材名「ぐみの木と小鳥」(光文書院)の授業を「探究の対話(p4c:philosophy for children)」の実践として、各学級3回の実践を以下のように行った。

1回目：価値の把握		「おもいやり」について不思議に思うこと、みんなに聞いてみたいこと、みんなと話し合ってみてみたいことを「しりたいなカード」に書く。
2回目：「問い」を立てる		「しりたいなカード」から問いを4つに絞り、この中から問いを選ぶ。 【選ばれた問い】 1. おもいやりのころってあいての気もちをかんがえてはつげんすることだとおもいます。みんなはどう思うかな。 2. おもいやりがなかったら友だちができない。おもいやりがなかったら友だちにやさしくできない。みんなはどうおもうか。 3. どんなときにおもいやりのころってつかうの。 【コミュニティボールを回す練習をする】
本時： 3回目	教材文を読む	ぐみの木、小鳥、りすの三者のそれぞれの立場を確かめる。
	対話を始める	p4c ルールの確認をする。 ① ボール(コミュニティボール)を持った人だけが話せる。 ② まだ話していない人や話を聞いてみたい人へボールを渡す。 ③ 話がまとまらないときはパスできる。 ④ 友達が傷つくことは言わない。(態度にも表さない。)
	本時を振り返る	① 今日の対話からわかったことなどをノートにまとめる。 ② 今日の「探究の対話(p4c)」について振り返り「や・ゆ・よ」をする。「や」：優しく聴く、「ゆ」：ゆっくり話す、「よ」：よく考えるはどうでしたか?

(2) 対話の記録

選ばれた問い：どんなときに、おもいやりのころをつかうのか。

問いを立てた理由：わたしもおもいやりのころをつかって、みんながえがおになるようにしたい。

C1 (ずっと考えている様子。) 困っている時に使う。 T 例えばどんな時に困っているのかな。 C2 失敗した時。給食をこぼしたとか。 T みなさんはどうですか。 C3 確かにそんな感じ。 C4 友達がけがをしたときに大丈夫って。 T みなさんはどうですか。 C5 友達が悩んでいる時に。 T なぜ悩んでいる時に使った方がいいと思うの。 C6 発表とかで悩んでいたら… C7 思いやりの心は高齢者や友達が困っていたら使う。	T 高齢者ってわかりますか。 C8 お年寄り。C9 例えばバスとかでおじいちゃんやおばあちゃんがすわっていませんでしたらどうぞって。 T 言うんですね。 C10 わたしは思いやりの心はクラスの友達がルールや約束を破っていたら「だめだよ」って教えてあげたい。 C11 大丈夫? って声をかけてあげる。 C12 思いやりの心は緊張している時とかにアドバイスをしてあげる。
---	--

この対話の当初、筆者は自分の考えとその理由を話すように伝えていたが、話したいとの挙手が多く、理由を伝えるまでには及ばなかった児童もいた。理由を伝えることでその考えがよく伝わるのであるが、筆者は、まずは考えを話してもらうことから対話は始まるのではないかと考え、対話を進める方向へ切り替えた。これからは、学習時間の1時間を教材について考える、あと1時間を子どもが立てた「問い」について対話を行うというように、時間をかけて対話と対話についてのふり返りを行いたい。

(3) 振り返りからの考察

児童の振り返り記述（原文のまま）を下記に記す。

①気が付いたこと・発見したこと・新しく問いになったことについての振り返り
1. ころにのこったことば ぼくはいろんな人のいけんをきいてAさんはみんなをうれしくさせることばなんだなあとおもいました。あたしくはっけんしたことは、おもいやりのころは、おともだちがこまっているときやなやんでいるときにつかうんだなあとおもいました。りゆうは、おもいやりのころは、どんなときにつかうのかなと思ったけどきづいたのでこれを書きました。 2. ともだちがなやんでいたならそのはなしをきいてみるといいと思いました。
②これからこうしたいと考えたこと（これからの自分）についての振り返り
3. いままでは、おもいやりのころって、なにしかしりませんでした。きょうあたらしくきずけたからうれしいです。どうしてかとうととおもいやりのころがなかったらいやなことをしていること、とかきづけないからです。 4. これからわ、ともだちをたすけたいです。どうしてかという、ともだちがけがをしたときにたすけられるからです。みんなをいい思いにしたいです。これからはたすけたいです。じぶんのころをみんなのころをまもるためにたすけたいです。たいせつなころにしたいです。ぼくはみんなをまもりたいです。
③「〇〇さん」のお話で、心に残った言葉についての振り返り
5. ころにのこったことばは、Eさんの高れいしゃにおもいやりの心をつかうべきところとところです。どうしてかという、ころれいしゃは力がよわいからいいと思いました。
④「探究の対話 (p4c)」の意義についての振り返り
6. かんがえてたけどどうやっていうかわからなかったのでばすしちゃいました。つぎでるときは、ばすをしないようにきょうぜんぶならったのでつぎわがんばります。 7. ぼくはこれからしつもんを早くいいたいです。どうしてかという早くいわないとみんなにめいわくをかけるからです。

児童の振り返り記述を、上記①から④の4項目に分けた。6と7の児童は考える時間は確保していたが、沈黙が気になったようで、問いや「セーフティ」との関わりで考えたい。道徳科のアンケートでは、「クラスのおともだちのまえでじぶんのかんがえをはなすことはすきですか?」という質問には「苦手」と答えた児童が、「ボールをつかったおはなしは、たのしかったですか?」という質問には、「ぼくのところに（ボールが）きてはっぴょうもできてうれしいです。」「自分のいいたいことが言えたから」などの記述が見られ、普段話すことを苦手としている子が、コミュニティボールを持つことで話す意欲が増す効果や、友達が話している間はしっかり待つという姿も見られた。研究目的の、子どもが多様な考えにふれることのよさを実感しているかは、1. 2. 6. の児童の振り返りから、友達のことが心に残った、気が付いた、発見したということに現れている。

5. 今後の研究に向けて

子どもが立てる「セーフティに根ざしたコミュニティづくり」と子どもが立てる「問い」を軸にした授業づくりのために、引き続き、「探究の対話 (p4c : philosophy for children)」の実践の先行研究とその実践を通して検証を行う。

引用文献

- ジャクソン, トーマス/バトナー, アシュビー・リン, 中川雅道訳, 2015, 「スタートアップキット: 初心者の子どものテツガク授業集第3版」『臨床哲学』16: 110-134, (2022年1月18日取得, <http://hdl.handle.net/11094/51582>) .
- Lipman, M., Sharp, A. M. and Oscanyan, F. S., 1977, *Philosophy in the classroom*, Upper Montclair, N. J.: Montclair State College. (河野哲也・清水将吾監訳, 2015, 『子どものための哲学授業: 「学びの場」のつくりかた』河出書房新社.)
- 豊田光世, 2017, 『子どもたちの未来を拓く探究の対話「p4c」』東京書籍, pp. 18-31.
- 豊田光世, 2020, 『p4cの授業デザイン ともに考える探究と対話の時間のつくり方』明治図書, pp. 3-33.
- 露木和男, 2019, 『「やさしさ」の教育 センス・オブ・ワンダーを子どもたちに』東洋館出版社, p. 135.